二〇一五年八月一八日（参加者一五名）

秋水の高鳴る峡の奈落かな　わかば
秋めくや山路に昨夜の出水後　わかば
法師蝉四囲にしば啼く山湖かな　わかば
新涼や谷川の水高鳴りて　わかば
御目伏す石の地蔵へ法師蝉　菜々
かなかなの輪唱に覚む旅の宿　菜々
今生の声ふり絞り秋の蝉　菜々
松籟に夙川堤の秋を聞く　菜々
縮緬波たたみにたたむ池涼し　ひかり
彩窓を貫く秋日濃かりけり　ひかり
対岸に佇つは句仇秋澄める　ひかり
道をしへユーターンとは何ごとぞ　ひかり
吾が影に蛙とびこむ手水鉢　ぽんこ
岨道を急かせるごとく法師蝉　ぽんこ
山湖いま色なき風の渡りけり　ぽんこ
斑猫に道ゆずらるる吟行子　ぽんこ
猪母子現れて行厨大騒ぎ　こすもす
道をしへ忍者の如く失せにけり　こすもす

筒抜けの原爆ドーム鰯雲　宏虎
秋暑しバスの隣席太鼓腹　宏虎
蝉しぐれ枯山水に静ごころ　よし子
ラムネ壜桶に犇めく峠茶屋　よし子
物干しに色とりどりの浮輪かな　えむ
突堤に魚の匂ひや秋暑し　えむ
ひまわりに負けじと笑顔写真撮る　よう子
大の字に亀浮きて池澄めりけり　つくし
名水と標す井の中あめんぼう　かかし

定例句会みのる選

二〇一五年八月一八日（参加者一五名）